



里親 西岡道治さん宅 訪問記

西岡 道治さん、美千代さん

朋編集部 中日青葉学園 わかば館 施設長

寺井 陽一

知多学園 松籟荘 施設長

佐々木 仁美

中日青葉学園 あおば館 児童指導員

加藤 有美子

はじめに

現在、長久手市で里親になって16年になるベテランの西岡道治さん（59）、美千代さん夫妻宅を訪ねました。西岡夫妻は、現在は3人の里子と共に実子も含め、9人家族で暮らしています。16年の歳月の中、18人のお子さんを預かり、わが子同様に育ててこられたと笑顔で話されています。いろいろとこれまでの感慨深いエピソードや今後の展望について、その一部ではありますがここに紹介をしたいと思います。



里親を始めた経緯

里親を始めるにあたっての要因は、いろいろありました。すでに里親をしていた素敵な先輩の姿もありましたが、一番のきっかけは、私（西岡氏）の実父が養護施設で育ったと聞いておりましたことが、一番大きなきっかけです。子どもにとって家庭の大切さは言うまでもないのですが、どこで育つか、どのような環境で育つかが大事だからこそ、この分野に関わりたい、と思い、さらに深く考えるようになりましたね。

今では、里親を長年やってこれたのは、自分のライフワークになるような星の元に生れたのかな、と思っています。

奥様いわく、ご主人から、結婚当初から将来里親をしたいと聞いていたので、心の準備はしていました。夫婦で子育てをしながら10年たち、長女が小学5年生、末の娘が5歳の時に西岡氏から里親登録をしたいと聞きました。その時は、もう少し子どもが大きくなってからでも良いじゃないかと思いましたが、父親としても夫としても普段から4人の娘の子育てへの協力や、私を一番に考えてくれることもあったので、不安もありましたが決断できました。ご主人の里親に対する思いや、どの子にも手を差し伸べたい考えに、付いて行こうと思えました。



普段の生活・大切にしていること

現在、預かっている子どもは3人で、中3と小学4年の男の子、5歳の女の子1人と生活しています。実子以外の子どもが家族に加わっても、里親は地元民ですので地域の中で生きているというパイプの太さは強みです。地域の人にも理解していただき暮らしています。普段の生活は、子どもたちは家族と共に暮らす普通の生活です。里子だから特別ということはなく、実子の娘たちと同じよう



な生活を送っています。私たち夫婦は、親として日常において毎日普通の子育てをする喜びを大切にしています。

実子も里子も寝顔が可愛い、保育園の送迎でも近所の子どもが自転車登園をしているのを見て、自分も乗りたいと言うので自転車で登園しています。他に学校行事、授業参観、地域の催しにも娘にしたようにこれまでもおり参加をしています。年間行事では、お正月をはじめ節分、お誕生日にはその子の好きなメニューを聞いて全員でお祝いをしています。誕生日は幾つになっても、特別な日と捉えてわが家では最も大切にしている行事です。

私たちにとって普通であることが、施設の普通とは違うということが、共に生活をする中で見られます。例えば、このようなエピソードがありました。「ご飯だよ～」と呼ばれた声に、子どもたちはテーブルの席に着いたのですが、ご飯が並んでないのを見て「ご飯が無い…」と、大騒ぎでした。施設では、ご飯が当たり前食卓に用意されていたようで、ないと思ったようです。この場面は私たちも里子も施設と家庭の違いを感じた出来事でした。一般家庭では、献立表もなく今日のメニューも決まっていますね。だから「今日のご飯は何？」子どもの質問に「いろいろだよ」と答えています。食事メニューは、みんなが一緒ではなかったり、何が食べたいかその日の状況によりリクエストを聞いたり、それが家庭ですよ。

子どもの人数が増えて大変なことは、お風呂でした。人数が多いので、順番1つ取っても大変で悩んでいた時すぐ前のアパートを貸していただいて解決できました。今では、男組は洗面器を持ってお風呂に出掛けています。

配慮として、高校生は1人部屋、小学生には勉強机を用意し片づけが苦手と言っていますがスペースの仕切りを作るなど、工夫ができるようにしています。このように生活の中で習慣を身に付け、社会性が身に付くようにしています。

また、年齢差や男女差もあり気を遣う面も大切ですが、何よりも子どもにとって人間関係の練習ができる場所でもありますね。成長が楽しみですよ。



里親の 今後について

日本は里親の制度も世間から理解されてきましたが、ヨーロッパ型のような制度が根づくのは随分な時間がかかり、先になると考えています。それは、家庭親の根本的な違いがありますね。欧米の人は、家庭を大事にして個人のプライバシーが確立しているからこそ、血縁のない子が入っても受け入れられる土台ができています。一方、アジア人は家庭の中で一人一人の個の確立を重要視していませんね。お父さん、お母さん、子ども、祖父母、親戚と家族の関係の中で個人というよりは、家族の一員として自分の存在があるという感じなので、血縁のない子どもが入ってくるのがかなり難しいと思います。

この先、里親率を増やすことを考えると、愛知県の場合、里親率が他県に比べて高くないのですが、実は縁組率は高いんですよ。

しかし、縁組は里親率から外れますので里親の率は低くなっています。縁組里親が増えることもとても良いことだと思うので、日本においては縁組里親を増やすことと、養育に際しては施設職員



等プロ的（専門的）な人材を育てていく必要があると思います。

施設との連携としては、役目をしてほしい。また、施設は養育を理解した人材育成をしていき、ライフプランで施設退職後に里親をするという理想の流れを作れるといいですね。一般人に里親希望を募るだけでは、里親は増えていかないと考えます。アプローチの方法を考えていかなければ、将来の里親の存続も危うくなると心配をしていますので今後もつながっていきたくないとPR活動をしています。

できることとして、一般の方に里親を知っていただき里親の応援団になってもらいたいです。

最後に

どの年齢の子どもも受け入れたいが、高年齢の子どもが里親宅に入るのは窮屈だと思うので、近くに家を借り生活してくれたら 出世払いでいいからご飯だけでも食べに来たらいい、こんな関わりもあるのではないかと思いますね。

家庭の中で温かいご飯を食べてしっかり自立していったらと考えています。

私たちは親ではないけど親代わりです。家庭だから距離が近いので、生活を共にしていると里子もわが子と一緒にですよー

と話されていることが印象的でした。

西岡さん宅を訪問させていただき家庭養育の大切さを実感し、これから先、施設との連携の必要性も感じた訪問でした。編集部一同ホッとする居場所であることを実感しながらお話を聞かせていただきました。

